

日本語力の異なる児童が共に学び合う教室づくり 学びのためのコミュニケーション力を育む

小池愛

第1章 問題の所在

日本語力の低い児童、日本語に初めて接する児童が、在籍学級において日本語力の不足による「学力不振」に陥っていることは、近年大きな問題として取り上げられている(高橋・バイパエ 1996)。特に、言語負担の大きい国語教育での学習達成は困難を極める。しかしながら、「一斉共同体主義」に陥っている学校や教師は、在籍学級で友人の獲得ができないこと、学習が達成できないことを、児童個人の性格や才能や努力における「個人差」であるとして当該児童に対して有益な支援を行っていない(児島 2001、2002)。

学校において一番多くの時間を過ごすのは在籍学級である。本来はその在籍学級においても学びを分断しないための適切な指導体制が必要なのである。そして日本語力の低い児童の学びを在籍学級において伸長していくことは、日本語力の高い児童の学びの伸長にも繋がるはずである。「個人差」を認め、それを児童らの学びに生かしていく教室をつくるのが重要なのである。その上で、取り出し指導や日本語教室との他を認め合った有機的な連携を組んだ指導体制を構築していくべきである。本論は、日本語力の異なる児童が共に学び合う教室をつくるために、児童らにコミュニケーション力を付けることが不可欠であると考え、実践を通して支援の具体策を明らかにするものである。

第2章 先行研究

日本語力の異なる児童が共に学び合う教室をつくるにあたって、まず日本語力の低い児童が置かれている学習環境を、取り出し指導、在籍学級との連携による指導、在籍学級での取り組みに分類して、その問題点を明らかにする。

取り出し指導は、国語教育との連携を図った光元(1998)の実践と、同じく国語教育の達成のために児童の母語を併用して指導を行った清田(2001)の実践を分析対象とした。両者の研究は、日本語教育と国語教育の連携を求めることは、日本語力の低い児童が自己の思考力や想像力を高めるために必要なことであり、また、在籍学級において学習達成するために不可欠であることを示唆するものである。しかしながら、教材や授業進度を在籍学級と同様にすることで在籍学級での授業への参加を促すものであり、在籍学級における授業の変革を

求めるものではない、一方通行的な連携に留まっている。

在籍学級と日本語教室の連携による指導では、日本人児童との友好的な交友関係を構築することで、外国人児童の情緒安定と学力向上を目指した矢崎(2004)の指導と、「外国につながる児童」が多く在籍する A 小学校における高橋理恵教諭の実践(2004)を扱った。

矢崎(2004)が、外国人児童の情緒安定のみならず学力向上していくことを教科学習だけでなく、児童同士の交友関係に求めたことは、日本語教室の周縁化脱却のためにも有意義なことであった。しかしながら、友好関係を築くためのソーシャルスキルの学習項目選定には、日本人児童への同化を促すことにならないかといった疑問を呈するものである。高橋理恵教諭の行った方法は、日本語教室の担当教師が在籍学級においても授業を行い、日本語教室通級児童の学びを多角的に観察していこうとしたものである。そこには日本語教室からの一方的な連携を越え、在籍学級を巻き込んだ連携が存在する。

在籍学級における指導では、日本語を第一言語とする児童、第二言語とする児童双方の育ちに結びつく支援が必要であるとした福山(2003)の論考を扱った。多文化理解に対する教師の肯定的な構えが教室内に親和的環境を生み出し、加えて言語的不利益を軽減する指導法と、同化圧力に結びつかない主体的関わりの機会の提供によって、両者の育ちが期待されるという。しかし、多文化教育に関しての議論がないこと、言語的不利益を軽減する指導の詳細がないことなどから、双方の育ちを期待する教室をつくるには、まずそのための理論研究を行う必要がある。

以上の先行研究分析より、在籍学級での学習に対して児童の学びとは如何なるものかをまず捉え直し、児童の学びのためには教師がいかなる支援をしていくことが必要であるかを検討する必要があることが明らかとなった。その上で、言語教育としての国語教育とコミュニケーション力育成が如何なる関わりを持っているのか、またどのように関わるべきなのかを議論することが重要である。

第3章 理論研究

第3章では、理論研究として、学びとは何か、共に学び合う環境をつくるためには教師が如何なる支援をすべきか、コミュニケーション力と国語教育の関わりはどのようにあるべきかを述べる。

学びとは何かを検討するために、ヴィゴツキー(1935[2003])の「最近接発達領域」の考え方を応用した。「最近接発達領域」とは、「大人の指導や援助のもとで可能な問題解決の水準

と、自主的活動において可能な問題解決の水準とのあいだのくいちがい」(ヴィゴツキー、1935[2003]:p.18)である。しかしながら、子どもの発達を促進し支えていく力となるものは必ずしも大人とは限らず(佐藤、1999)、有益な相互作用を及ぼす周囲の子どもの存在も非常に重要である。では、他者との有益な相互作用によって自己の最近接発達領域を拡大させ得る場はどこにあるのだろうか。

レイブとウェンガー(1991[1993])は、学習とは社会的実践共同体への参加であるとする「正統的周辺参加論」を提唱している。実践共同体に参加し、十全的参加者となっていく過程においてアイデンティティが生まれ、共同体の変容に関わっていくことがすなわち学習なのである。実践共同体に参加するためには、そこへのアクセスが許されねばならない。佐伯(1996)は、人は誰も「見えないコミュニティ」を背負っているとし、コミュニティとコミュニティが重なり合うなかで、新しいコミュニティへ参加しているという。そうした参加には、一方から他方への「境界越え」が起きている。「境界越え」とは実践共同体へのアクセスが可能であることを指すが、もしそこに何らかの「ツイタテ」があれば、「境界越え」は成立しない。従って学びや、共同体の再編や変革も起きることはないのである。

これらの知見をもとに本論では学習を、「実践共同体へ参加することで、自分とは異なった考えや、見方、経験を持った個人と出会い、さまざまな相互作用を通して、実践共同体における参加者として互いを認め合い、さらにより良い共同体を作ろうとしていくことであり、その中で自己を築いていくこと」と定義した。

共同体への参加には、「ツイタテ」を崩壊させる支援が不可欠である。そのためには、「すべての生徒がより民主的な価値観、信念、また文化を超えて機能するために必要な知識、スキル、態度を育てられるように支援すること」(バンクス 1999) を目的とした多文化教育の理念が応用でき得る。多文化教育における「公正な教育方法」とは教師が社会的不利益を被る立場にいるマイノリティ生徒に対して学習環境を整備する活動を意味している(額賀 2003b)。環境を整えるには、物理的、文化的、関係的資源を当該児童に再分配することが必要であり、それによって児童が個々の「ツイタテ」を越えることができるのではないか。

学びの環境を整えた上で、学びの共同体へと参加するには、児童間の相互作用を活性化させるためのコミュニケーション力を育成していかなければならない。甲斐(1998)は、国際化、情報化などの時代の流れに視点を据えると国語教育においては、他教科との連携や日本語教育を必要とする児童の受け入れを視野に入れることなどが必要であると述べている。日本語力の低い児童の増加は、「伝え合う力」として国語教育においてコミュニケーション力の

育成が重要視されてきた一端を担っているのである。国語教育がコミュニケーション力の育成を重要視しているのであれば、日本語力の異なる児童が在籍する教室において、学びの共同体を形成するにあたり、それを利用して、児童らのコミュニケーション力を伸ばしていくことは可能であろう。本論では、コミュニケーション力を、「伝達」力と「受容」力さらには共同体におけるアイデンティティの確立、つまり十全的参加者になるための「思考力」であると捉え、整えられた環境の元で力の伸長を図っていくこととする。

第4章 実践の方法と児童の実態

本研究における実践の対象は、外国人学校の小学部第2学年児童29名である。ほぼ全ての児童が日本語を第一言語としており、「日本語」の授業は学習指導要領(国語)に示された目標を遂行することを求められている。29名のうち4名は日本語力の低い児童(Aくん、Bさん、Cくん、Dさん)である。従って、先行研究にあげた国内の小学校と同様に、日本語力の異なる児童が共に学び合う教室をつくる必要があるのである。

実践期間は、2004年4月9日から2004年11月12日までの全82回である。筆者自身は、教室を運営する教師として関わった。児童の実態把握と実践の分析は、筆者が授業後に記録したノート、授業中の会話の録音、児童が作成したプリントやノート、校長や担任教師の話を元に行っている。

4名の日本語力の低い児童は、言語環境、日本語使用域などにおいて様々な様相を呈しており、それぞれが必要としている支援がある。Aくんには、他児童間で話される日本語を聞いたり見たりする機会を増やしていくことが必要である。Bさんには、教師 児童という関係だけでなく児童 児童の関係を含んだ活動により、日本語を活用する機会を与えなければならない。Cくんは、少ししかわからなくてもやってみようという気持ちが強いので、理解の鍵となる語彙や文を明示することで文章理解がスムーズになると考えられる。Dさんは、自分の考えを伝えるという活動を好むため、相互作用を生み出す活動によって他者の言葉を理解し自己の思考を深め、表現していく力をつけることができるであろう。

日本語力の低い児童の実態から得られたこれらの支援の方向性、相互作用を伴う活動を取り入れることや言語に焦点を当てた支援などは、日本語力の高い児童にとっても、その学びの伸長に有効な手段となり得ると考え、実践を展開していくこととする。

第5章 実践の分析

第5章においては、日本語力の低い児童4名と、教室全体が持つ「ツイタテ」と、それを越える「動機」となった出来事を追うことによって、彼らが共同体に参加していく過程をそれぞれ記述した。

第6章 共に学び合う教室をつくる 考察とまとめ

第5章の実践の記述より、日本語力の低い児童と高い児童それぞれが抱く「ツイタテ」が示された。A さんのツイタテは、「日本語力の低さ」()であり、それに起因する「関係づくりに対する受身の姿勢」()であった。また、B さんは、「表現すること、伝えることに消極的な態度」()が共同体への参加を拒んでいた。C さんの「ツイタテ」は、「学びへの意欲の低さ」()と、「考える力の低さ」()であった。そして、D さんには「表現する場の不足」()が「ツイタテ」として存在していた。日本語力の高い児童の「ツイタテ」となっていたのは、評価されるという権力のある「教師の言葉を受け取ることが正しいとする意識」()であり、それによって「考える力の低さ」()も障害となっていたのである。

これらの「ツイタテ」を越えるに至った動機は、「環境の設定」「活動の設定」「日本語力の低い児童を見据えた教師の言語支援」「児童間相互作用」に分類される。まず、「環境の設定」が生み出した動機があり、環境の設定に基づいた相互作用を伴う活動によって「児童間の相互作用」に影響された動機が生まれていた。さらに、教室に共同体を育む場としての環境が設定され、それに伴う児童間の相互作用が活発化するための表現することの「活動の設定」が重要な動機となり働いていた。それと共に、「日本語力の低い児童を見据えた教師の言語支援」は、児童間の相互作用場面におけるコミュニケーション力育成に対して有効に働いており、「ツイタテ」を越える手段となっていたのである。

これらの「ツイタテ」を越える動機と教師は密接な関わりを持っていた。環境を設定することにおいては、「文化的資源」と「関係的資源」を分配しており、活動の設定においては、関係的資源を分配していた。さらに日本語力の低い児童を見据えた言語支援では、物理的資源を主に分配していることが示された。しかしながら、「ツイタテ」を越える動機となったのは、教師によるものだけではない。児童間の相互作用を通して、児童自らが相手に対して物理的資源や、文化的資源、関係的資源を分配していたことが明らかになったのである。すなわち、学びの場となる共同体形成に関しては、児童らの相互作用があることが重要なのである。

このような動機を考察したことから、共同体におけるコミュニケーション力、すなわち学

びのためのコミュニケーション力は、「環境」「活動」とさらに「日本語力の低い児童を見据えた言語支援」が行われる「児童間相互作用」と深い関わりを示していることが明らかになった。「環境」を整えることに関しては、「他者」を意識することがコミュニケーション力を育む準備として関連しており、整えられた「環境」において展開される「活動」「児童間相互作用」では、他者への表現、他者からの受け取り、自己の考えを深めていくというコミュニケーション力が育成されていた。そしてそのようなコミュニケーション力が育まれる過程においては「日本語力の低い児童を見据えた言語支援」が有効な手立てとなっていたのである。

研究の結果から、日本語力の低い児童は彼らの「ツイタテ」を越え、学びを伸長していくとともに、共同体における一員として他者に認められていくことが示された。彼ら自身が第二言語である日本語を自己を表現する手段として用い、共同体の活動に参加していったのである。また、日本語力の低い児童が共同体に参加したことは、日本語力の高い児童の学びにも好影響を及ぼした。それは、活動の理解の深まりであったり、表現する力や受け取る力、考える力の育成にも寄与していた。「自分とは違った考えや、見方、経験を持った」他者と共に学び合う教室をつくる意義はここにあるのである。

参考文献

- 池上摩希子(1999)「実践報告 センター小学校低学年クラスにおける算数プログラムの設計」『中国帰国者定着促進センター紀要』第7号
- 岩立志津夫・小椋たみ子編著(2002)『シリーズ/臨床発達心理学4 言語発達とその支援』ミネルヴァ書房
- ヴィゴツキー,L.S.(1935[2003])『「発達の最近接領域」の理論 教授・学習過程における子どもの発達』(土井捷三・神谷栄司 訳) 三学出版
- 宇土泰寛(2000)『地球号の子どもたち-宇宙船地球号と地球子供教室』創友社
- 太田晴雄(1998)「学校言語を母語としない子どもの教育 アメリカの場合」中島智子編著『多文化教育 多様性のための教育学』pp.33-59 明石書店
- (2000)『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院
- (2002)「教育達成における日本語と母語 日本語史上主義の批判的検討」宮島喬・加納弘勝 編著『国際社会2 変容する日本社会と文化』pp.93-118 東京大学出版会

- 岡崎敏雄(1995)「年少者言語教育の再構成 年少者日本語教育の視点から」『日本語教育』86号
- 岡崎 眸(1994)「内容重視の日本語教育 大学の場合」『東京外国語大学論集』49
(2002)「内容重視の日本語教育」細川英雄 編『日本語教師のための知識本シリーズ ことばと文化を結ぶ日本語教育』pp.49-66 凡人社
- 岡崎眸・野々口ちとせ(2002)「共生言語としての日本語」の教育と地域の日本語教室」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第55巻
- 岡本夏木(1985)『ことばと発達』岩波新書
- 奥田俊博(2003)「外国人児童を視野に入れた国語科教育と日本語教育」『九州女子大学紀要 人文・社会科学編』第40巻1号
- 甲斐睦朗(1998)「連携からとらえ直した国語教育 日本語教育との連携を中心に」
『日本語学』17号
(2002)「言葉を見つめる・国語を教える 国語科はどういう言語能力を育成する教科なのか」『日本語学』21号
- 甲斐雄一郎・中嶋香緒里(2002)「国語教育における言語のとらえ方」『日本語学』21号
- 外国人子女の日本語指導に関する調査研究協力者会議(1998)『外国人子女の日本語指導に関する調査研究 最終報告書』東京外国語大学
- 海保博之・柏崎秀子(2002)『日本語教育のための心理学』新曜社
- 金井香里(2001)「ニューカマーの子どもに対する教師の認知と対処 ボーダーの形成と調整を中心に」『教育学研究』第68号第2号
- 川上郁雄(2001)「転換期の日本語教育」『宮城教育大学紀要』第35巻
(2002)「年少者のための日本語教育」細川英雄編『日本語教師のための知識本シリーズ ことばと文化を結ぶ日本語教育』pp.81-100 凡人社
(2003a)「年少者日本語教育における「日本語能力測定」に関する観点と方法」『早稲田大学日本語教育研究』2号
(2003b)「JSL 教育学の構築へ向けた予備的考察 オーストラリアの ESL 教育の分析を通じて」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』16号
(2003c)「年少者日本語学習者の日本語能力測定の方法 JSL バンドスケールの試み」『2003年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
(2004)『JSL バンドスケール(JSL Bandscales)2004 試行版・小学校編』早稲田大

学大学院日本語教育研究科年少者日本語教育研究室

清田淳子(2001)「教科としての「国語」と日本語教育を統合した内容重視のアプローチの試み」『日本語教育』111号

倉八順子(2002)「多文化間コミュニケーションを可能にするもの」渡戸一郎 他編『多文化教育を拓く マルチカルチュラルな日本の現実のなかで』pp.172-193 明石書店

グラント,C.A./ラドソン・ピリング,G.(1997[2002])『多文化教育事典』(中島智子、太田晴雄、倉石一郎、石井昭男 訳) 明石書店

国府田晶子(2004)「絵本と対話による「読み書き能力」の育成 JSL 教育を必要とする定住型児童を対象に 」『早稲田大学日本語教育研究』第5号

古賀正義(2004)「構築主義的エスノグラフィーによる学校臨床研究の可能性 調査方法論の検討を中心に 」『教育社会学研究』第74集

児島 明(2001)「ニューカマー受け入れ校における学校文化「境界枠」の変容 公立中学校日本語教師のストラテジーに注目して 」『教育社会学研究』第69集

(2002)「差異をめぐる教師のストラテジーと学校文化 ニューカマー受け入れ校の事例から 」『異文化間教育』16号

齋藤ひろみ(1998)「内容重視の日本語教育の試み 小学校中高学年の子どもクラスにおける実践報告 」『中国帰国者定着促進センター紀要』第6号

(1999)「教科と日本語の統合の可能性 内容重視アプローチを年少者日本語教育にどのように応用するか 」『中国帰国者定着促進センター紀要』第7号

(2001)「「学習」を支える日本語能力の育成に向けて」『世界をひらく教育』23号

(2002)「学校における日本語学習支援」『日本語学』21号

(2003)「外国人児童生徒支援ネットワークの可能性 分断された学びを接合するために 」『国際教育評論』1号

佐伯 胖(1995)『「学ぶ」ということの意味』岩波書店

(1996)「学びあう共同体をつくる」佐伯胖・中西新太郎・若狭蔵之助 編著『フレネの教室 学びの共同体』青木書店

佐伯胖・宮崎清孝・佐藤学・石黒広昭(2000)『心理学と教育実践の間で』第2版 東京大学出版会

佐々木倫子(1998)「これからの国語教育 日本語教育の立場から 」『日本語学』17号

- 佐藤公治(1996)「認知心理学からみた 読みの世界 対話と協同的学習をめざして」北大
路書房
- (1999)『認識と文化 10 対話の中の学びと成長』金子書房
- サモーバ L.A.他(1983)『異文化コミュニケーション入門』(西田司 他 訳) 聖文社
- 清水 健(2002)「国語科教育と目標に準拠した評価」『教育フォーラム』第 29 号
- 清水睦美(2004)「学校現場における教育社会学者の臨床的役割の可能性を探る ニューカ
マーを支援する学校文化変革の試みを手がかりとして」『教育社会学研究』第 74 集
- 朱 桂栄(2003)「教科学習における母語の役割 来日まもない中国人児童の「国語」学習の
場合」『日本語教育』119 号
- スカーセラ,R.C./ オックスフォード,R.L.(1992[1997])『第 2 言語習得の理論と実践 タペ
ストリー・アプローチ』(牧野高吉 訳・監修) 松柏社
- 牲川波都季・細川英雄(2004)『わたしを語ることばを求めて 表現することへの希望』三省
堂
- 高木展郎(2002)「カリキュラム構成と評価」『日本語学』21 号
- 高橋 登(1999)『子どもの読み能力の獲得過程』風間書房
- (2001)「学童期における読解能力の発達過程 1-5 年生の縦断的な分析」『教育
心理学研究』49 号
- 高橋正夫・シャロン S.パイパエ(1996)『「ガイジン」生徒がやって来た「異文化」としての
外国人児童生徒をどう迎えるか』大修館書店
- 田島信元(2003)『認識と文化 1 共同行為としての学習・発達 社会文化的アプローチの視
座』金子書房
- 谷口すみ子(2001)「何が学習されなければならないのか」青木直子・尾崎明人・土岐哲 編
『日本語教育を学ぶ人のために』pp.15-50
- 恒吉僚子(1996)「多文化共存時代の日本の学校文化」堀尾輝久・久富善之 編『講座学校 6
学校文化という磁場』pp.215-240 柏書房
- 徳井厚子(2002)『多文化共生のコミュニケーション 日本語教育の現場から』アルク
- 中島和子(1998)『バイリンガル教育の方法 地球時代の日本人育成を目指して』アルク
- 中島智子(1998)「多文化教育の視点」中島智子 編『多文化教育 多様性のための教育学』
明石書店

- 奈良ゆきの・無籐隆(1991)「ことばの発せられるとき ある聴覚障害をもった子どもの事例から」無籐隆 編『ことばが誕生するとき 言語・情動・関係』pp.267-334 新曜社
- 西川長夫、渡辺公三、マコーミック・G(1997)『多文化主義・多言語主義の現在 カナダ・オーストラリア・そして日本』人文書院
- 西阪 仰(1997)『認識と文化 1 3 相互行為分析という視点 文化と心の社会学的記述』金子書房
- 西原鈴子(1996)「外国人児童生徒のための日本語教育のあり方」『日本語学』1 8号
- 縫部義憲(1993)「児童に日本語教育学の構築に向けて(1) 現状と課題：広島県を中心に」『広島大学教育学部紀要』第二部 第4 2号
- (1999)『入国児童のための日本語教育』スリーエーネットワーク
- 額賀美紗子(2003a)「アメリカの多文化教育における教師のストラテジー 「英語を母語としない児童」を対象にして」『異文化間教育』1 7号
- (2003b)「多文化教育における「公正な教育方法」再考 日米教育実践のエスノグラフィ 」『教育社会学研究』第73集
- 野島一彦(2000)『エンカウンターグループのファシリテーション』ナカニシヤ出版
- 野村敏夫(2001)「日本語の国際化と国語教育」『SCIENCE Of HUMANITY BENSAN』33号
- 野村眞木夫(2002)「文章構造の指導のために」『日本語学』2 1号
- 野山 広(2000)「地域社会における年少者への日本語教育の現状と課題」山本雅代編著『日本のバイリンガル教育』pp.165-212 明石書店
- バンクス,J.A.(1996[1999])『入門多文化教育 新しい時代の学校づくり』(平沢安政 訳) 明石書店
- 広田康生(1996)「総論 多文化化する学校・地域社会 外国人児童生徒問題を出発点にして」駒井洋 監修、広田康生 編『講座外国人定住問題第3巻多文化主義と多文化教育』pp.15-34 明石書店
- 福山文字子(2003)「教室内の多文化化を活用した国際理解教育 第二言語話者と第一言語話者、その双方の育ちを目指して 」『国際理解教育』9号
- 細川英雄(1997)「日本語教育の観点から見た「国語」」『語文』第98号
- (1999)「日本語教育と国語教育 母語・第2言語の連携と課題 」『日本語教育』100号

- (2001)「新しい「国語表現」の可能性 コミュニケーション能力育成としての問題
発見解決学習」『早稲田大学国語教育研究』第21集
- (2002a)『日本語教育は何をめざすか 言語文化活動の理論と実践』明石書店
- (2002b)「ことば・文化・教育 ことばと文化を結ぶ日本語教育を目指して」細川英
雄 編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社 pp.1-10
- 松本恭子(2004)「年少者日本語教育研究の動向と課題」中国帰国者定着促進センター
<http://www.kikokusha-center.or.jp/resource/ronbun/kakuron/31/031.htm>
- 光元聰江(1998)「外国人児童に対する教科学習について 日本語教育と国語教育との連携
を例として」『岡山大学教育学部研究集録』第108号
- (2002)「子どもの成長を支援する日本語教育 日本語と国語との関連指導を通し
て」『岡山大学教育学部研究集録』第121号
- 光元聰江・三宅節子(1998)「説明文にあらわれた複文について 小学校国語の日本語補助教
材作成資料として」『岡山大学教育学部研究集録』第107号
- 光元聰江・室山朱美・小林真里子(2003)「日本語力の異なる外国人生徒への国語指導」『岡山
大学教育学部研究集録』第122号
- 森 敏昭(2002)「学習指導の心理エッセンス」海保博之・柏崎秀子 編著『日本語教育のため
の心理学』pp.153-176
- 森元桂子(2003)「表現を「探り出す」授業の組織化について」『早稲田大学日本語教育研究』
第2号
- 文部省 (1999)『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社
- 文部科学省(2003)『学校教育における JSL カリキュラムの開発について(最終報告書)』文
部科学省初等中等教育局国際教育課
- (2004)『日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査(平成
15年度)の結果』http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/16/03/04032401.htm
- 矢崎満夫(2004)「外国人児童と日本人児童とのインターアクションのための日本語支援
教室内ネットワーク形成をめざしたソーシャルスキル学習の試み」『日本語教育』
120号
- レイブ/ウェンガー(1991[1993])『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』(佐伯胖
訳) 産業図書

ワーチ,J.V.(1991[2004]) 『心の声』 (田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子 訳) 福村
出版

Banks,J.A. & Banks,C.A.M.(Eds.)(1993) *Multicultural Education: Issues and
Perspectives*(2nd ed.).Allyn and bacon.

(1995) *Handbook of Research on Multicultural Education*. Macmillan.

Cummins,J. & Swain,M.(1986) *Bilingualism in Education*, Longman.